

ロシア国立海軍文書館の歴史と所蔵史料

マリナ・エフゲーニエヴナ・マリヴィンスカヤ (M. E. Мальвинская)

はじめに

はじめに、報告者に対し、東京を訪れ、皆様の前で報告する機会を与えてくれた貴研究所の配慮に感謝したい。

数千キロメートルの距離と数時間の時差がサンクト・ペテルブルグと東京とを隔てており、このことは残念ながら我々に対し、日本の同僚との恒常的な学問的接触の機会を与えてはいない。しかしながら、今日の会合が、共同の学問的研究と学問的刊行の準備の出発点となることを、我々は強く期待している。

私の意見では、ロシアの文書館員と日本人歴史家の共同作業には、意義深い共同研究の出版に至る可能性があるが、この期待が実現されるためには、我々はなによりもまず、お互いをよく知らねばならず、そして正にこの目的のために今日の報告がある。この主要な課題は、ロシアの諸文書館中最も古い文書館の歴史、その文書、参考道具、文書館の原史料に基づき作成された史料集を語ること、日本に関係する文書の全般的特徴づけを行うことにある。

一 ロシア国立海軍文書館の歴史

ロシア国立海軍文書館は、一七世紀末から一九四〇年迄を包括する文

書の、二つとない収蔵機関である。換言すれば、我々の処のいい方では、「文書館の壁の中に二世紀の歴史が集約されている」のである。

今日では、海軍文書館には、一二一四八八五ファイルからなる二九〇九種類の単位史料群（以下フォンドという―訳者注）があり、その内一二七〇フォンド（七六二八〇七ファイル）は帝政ロシア期に属し、一六三九フォンド（四五二〇七八ファイル）はソヴィエト海軍期に属している。

毎年文書館の閲覧室には約四五〇名の研究者が仕事をしているが、もし文書館名に海軍という言葉がなかったとしたならば、その数は遙かに多いに違いない。何故なら、多くの人は、此には海軍の戦闘準備、海軍のハードウェア、海軍の戦闘行為を物語る文書のみが保存されていると思うからである。文書館の壁の中に収められている文書の豊かさを正当に評価するためには、歴史的に過去のロシアを凝視し、海軍と、そして勿論海軍軍人に対し最先端的ではない役割を与えた鎮国時代からロシアを解放したペーテル大帝期に戻らねばならない。二世紀の間、海軍士官達はロシア社会のエリートを形づくり、自己の祖国の形成と発展に顕著な貢献を行った。正にこの故に、文書館にはロシアの市民史に関しても多量の文書が保存されているのである。

我々の文書館は如何に創設されたのだろうか？ロシア海軍創立の公的

日付は一六九六年一〇月である。これに引きつづいて最初の海軍中央機関の創設がなされ、その内奥に最初の文書群が出現し保存された。一七二四年一月一七日(グレゴリウス暦二八日)、文書を文書館に集めるため、公文書保存係と写字生の職を定むべしとのペーテル一世の口頭指令により、海軍院(アドミラルテイストヴォ・コレギア)文書館が組織された。ロシア国立海軍文書館の起源はここに存する。海軍を統轄する最高機関に附属して創設された文書館は、海軍院に従属する海軍の諸機関諸施設の文書を収集し始めた。海軍院文書館は百年以上存続しつづけて、海軍文書館のその後に於て最重要の諸フォンドを構成する文書を集め保存した。一九世紀初頭、ロシアの院(コレギア)制度的統治組織は省庁(ミニステルストヴォ)制度に変わり、一八二七年、海軍院廃止と連動して、海軍院文書館は海軍省文書館に改組された。海軍省文書館の法規の中で書類受入れ規則が定められ、それに従って文書館には、「保存のため海軍省の全部局と官房から非現用書類」が入ることとなり、又、港湾機関の文書も同様となった。

官庁文書館たる地位は一九一八年迄維持され、同年六月一日の、文書館書類の再組織と集中化に関する人民委員会議法令により、独自の機関たる海軍院(ペードムストヴォ)中央文書館(一九一七年八月一〇日よりこの名称となった)は廃止され、単一国立文書館団体第三局第二部(海軍)の一頁となった。即ち国立機関となったのである。一九一八年より四一年の間に館名に若干の変更があり、一九四一年より九二年迄は、ソ連邦中央国立海軍文書館(ЦПАВМФ)と名乗り、ソ連邦の崩壊後、ロシア国所轄に入り、ロシア連邦政府の一九九二年六月二四日付法令に依り現在の名称、つまりロシア国立海軍文書館(РПАВМФ)となり、ロシア連邦文書館組織の中に入った。本館は海軍の歴史に係る文書を保存しているロシアでの唯一の国立文書館である。

二 革命前フォンドの内容

何が海軍文書館のフォンドを構成しているのだろうか?それは何よりもまず、最高中央機関文書、艦隊編隊諸部隊独立艦隊機関文書、軍港海軍基地文書、科学研究機関文書、海軍教育施設文書、そして水路部と学術諸部局の文書なのである。文書館のフォンド中には、前述した如く、ロシア国家の市民史に関する、また世界の多くの国々との政治的経済的文化的関係にかかわる大量の文書も存在している。

海軍を統轄する中央機関文書では、「ヴォロネジでの皇帝天幕文書」(Ф. 176)、「海軍令文書」(Ф. 177)、「海軍官房文書」(Ф. 176)、「アブラクシン大将官房文書」(Ф. 233)、「クリュイス提督文書」(Ф. 234)、「海軍院文書」(Ф. 122)、「主計局文書」(Ф. 135)、「造船局文書」(Ф. 138)、「造船監督局文書」(Ф. 218)等があり、海軍省諸部局文書では、「海軍大臣局文書」(Ф. 166)、「海軍省監督局文書」(Ф. 283)、「海軍省海軍局文書」(Ф. 215)、「海軍省官房文書」(Ф. 410)、「参謀部文書」(Ф. 417)、「参謀本部文書」(Ф. 418)、「海軍学術委員会文書」(Ф. 163)、「海軍技術委員会文書」(Ф. 421)、「造船補給本局文書」(Ф. 427)等があり、其他多くのフォンドには、ロシアでの造船問題を主宰する諸機関の創設と組織に関する史料が存在している。

一七世紀末より二〇世紀初頭にかかる艦隊建造についてはペーテル一世の命令と書翰が存在するし(本館には三百以上のペーテル大帝自筆文書がある)、槽権及び帆走艦隊の建造文書がある。そこには、バルチック海ではペテルブルグ、ノーヴァヤ・ラドガ、ロデイノイ・ポール、アルハンゲリスク、ヴィボルグ、クロンシュタット等の造船所に係る文書が、黒海ではケロシン、ニコラエフ、セヴァストポリ、タガンログでの造船に係る文書がある。また、これらの文書の中には、バルチック艦隊

のための蒸気艦造船についての情報がある。即ち一八五四～六三年のスクリュー型主力艦・フリゲート艦・クリッパー艦・砲艦の建造についてや、一八六二～六七七年の最初の装甲艦建造についての文書が存在しているのである。

ここにはまた、軍事技術の発展や造船分野での改良に関する文書があり、その中にはマカロフ提督によって提案された防水隔壁実験についての文書もある。

更にこれらの文書の中には、一七世紀末から二〇世紀にかけてのロシア海軍の軍事行動の諸記録が保存されている。ペートル一世のアゾフ行軍、一七〇〇～一七二一年の北方戦争期の海戦（一七一四年のガングット海戦や一七二〇年のゲレンガム海戦）、一八・九世紀対トルコ戦争への海軍参加（一七七〇年のシオスとチェスマン海戦）、一八五三年～五六年のクリミア（東方）戦争、一九〇四～五年の露日戦争、そして第一次世界大戦期の海上での諸事件等の記録があるのである。

一七世紀から二〇世紀にかけての世界の海洋の科学的研究と開発、地理的科学的探険、世界周航と遠距離航海の史的探求のための最も価値ある史料が、「海軍院文書」（φ. 212）、「チエルヌイシェフ元帥官房文書」（φ. 172）、「水路部文書」（φ. 913）、「水路局文書」（φ. 402）、「水路本局文書」（φ. 404）等なのである。

この中には、北氷洋沿岸住民や猟師等の一七～八世紀の北氷洋の航海、一七六八～六九年ロズムイスロフ指揮下のノヴァゼムリア探険時の装備、一七二五年ペテルブルグからオホーツクへの第一回カムチャッカ探険隊の発遣と発見の成果、オヴツインを頭とする分遣隊の航海、シユパンベルグ指揮下の艦隊の、オホーツクからボリシエレッツク、更にクリール列島を介しての日本への一七三八～三九年航海、郵便船聖ペトル号と聖バヴェル号によるベーリング並びにチリコフ指揮下のアメリカ北西海岸へ

の航海、等々にかかわる諸史料が存在している。

また前述の文書には、一八世紀後半の北極や太平洋北東部の調査史料がある。つまり、一七六四～六六年チチャゴフ指揮下の、カムチャッカへの北氷洋海路探索のための最初のロシア高緯度探索の史料があり、ロモノソフによる、「シベリア海」を介しての東方への航海の諸条件に関するメモが保存されているのである。

つづいてクルーゼンシュテルン及びリシヤンスキー指揮下の一八〇三～〇六年のスループ艦ネヴァ号・ナジェジダ号による最初の世界周航やゴロヴニン指揮下のクロンシュタットからカムチャッカはペテロパヴロフスクへのスループ艦ディアナ号の航海にかかわる史料がある。ゴロヴニンは、この時、クリール列島の海図作成の際に日本人捕虜となったのである。

更に、一八二〇年、ベリンスガウゼン及びラザレフ指揮下のスループ艦ボストク号・ミールヌイ号によるロシア最初の南極探険と南極発見についての史料があるし、またロシア海軍士官達によるアムール、クリール列島、アリューシヤン列島、サハリンの調査と研究、リトケ・コツェブイ・ウランゲリ・ネヴェリスキー・ミクロホーマクライ其他すぐれたロシア人航海者・研究者達による航海と地理的人類学的研究にかかわる諸史料が存在しているのである。

三 私文書フォンドとコレクシヨンフォンド

革命前の文書の中には六五種の私文書が加わっている。数は多くないものの、これらは極めて関心をそそるものである。何故なら、多くの私的性質の史料と豊かな画像が含まれているからである。若干例を挙げてみても、「アレクセーエフ文書」（φ. 32）、「ゴロヴニン文書」（φ. 71）、「グレイギ文書」（φ. 8）、「グリゴロヴィチ文書」（φ. 701）、「ドゥバ

ソフ文書」(φ. 9)、「コルチャク文書」(φ. 11)、「リハチヨフ文書」(φ. 16)、「マカロフ文書」(φ. 17)、「メンシコフ文書」(φ. 19)、「ロジェストヴェンスキー文書」(φ. 521)、「ルーシン文書」(φ. 1235)等々がある。

このほかに、文書館には三〇種類の革命前海軍の文書コレクションがある。それは、「エカテリナ二世官房より移管された海軍関係文書」(φ. 179)、「海軍審議会より移管されたペートル大帝手跡等文書」(φ. 223)、「海軍史料」(φ. 315)、「海軍中央地図出版局世界地図史料」(φ. 1331)等であり、最後のものは、一六〜二〇世紀初頭の手書き地図、世界地図其他もろもろのユニークな集成である。また「一八〜二〇世紀初頭ロシア艦隊航海日誌史料」(φ. 870)の中には、海軍史上の諸事件や艦隊の戦闘参加が反映されており、重要な地理的発見がこれによって裏づけられている。最近では、一七世紀中葉から一九一七年迄の「海軍官庁勤務員名簿コレクション」(φ. 406)が我々の閲覧者によって利用されている。

四 ソヴィエト期フォンド

ソヴィエト時代もまた海軍統轄中央諸機関の史料によって語られている。「ソ連邦海軍人民委員部文書」(φ. p.1678)、「海軍統帥本部文書」(φ. p.332)、「PKK参謀本部文書」(φ. p.1)、「海軍参謀本部文書」(φ. p.1877)等がそれである。それらは、バルチック海、黒海、北海、太平洋の諸艦隊と諸種の分艦隊の統帥と司令部に係るものである。革命的民主的諸機関の多くの文書群も存在する。「ヘルシンクフォルス・コツカ・クロンシュタット・セバストポリ兵士労働者代表ソヴィエト、全ロシア海軍中央委員会文書」(φ. p.21)、「海軍革命委員会文書」(φ. p.22)、「バルチック艦隊中央委員会文書」(φ. p.35)、「黒海艦隊中央委員

会文書」(φ. p.183)等がそれである。コレクションの中では、「ソヴィエト海軍艦船航海日誌」(φ. p.172)、「ソヴィエト海軍上級幹部名簿」(φ. p.2192)や、特に海軍大佐ザレスキーが集めた「艦船写真・絵葉書・ネガフィルムコレクション」(φ. p.2339)に言及する必要がある。

とりわけ最後のもののいくつかのアルバムは、露日戦争に係る絵葉書から成っており、そこには日本での消印のある日本の絵葉書もある。一九一八〜二〇年の国内戦期の白衛軍文書は特殊なグループを構成している。例えば、「全ロシア政府海軍省文書」(φ. p.1722)、「ヴラジヴォストーク港臨時海軍裁判文書」(φ. p.2023)、「アムール河川分艦隊文書」(φ. p.2179)等がそれである。

五 所蔵史料に係る参考書と史料集

しかしながら、文書館を語るならば、どのような参考書と史料集がロシア国立海軍文書館の時期に準備されたのかに関し言及しなければならぬ。何故ならば、それらの多くは、今日でも研究者や文書館員に役立つからである。

一九世紀後半、より正確にいえば一八七三年、海軍省文書館文書の分類と内容記述に関する委員会の作業が開始され、これを大海軍史家のベセラボ、コルゲエフ、オゴロドニコフが順次主導した。一八七七年から一九〇六年迄、一七世紀中葉から一九世紀初頭迄の海軍省文書館文書に関し、一〇巻の内容記述書が出版された。これは文書館史上最初の、フォンドに係る参考書の出版であり、この間、いくつかのフォンドではなんらかの変化が生じたにも拘らず、今日でも仕事に利用されている。この委員会は二三巻におよぶ海軍名簿を準備し出版した。これはロシア艦隊の個々の構成員に関する便覧であり、いくつかの過誤があるものの、今日迄その実用性を失っていない。現在館員の努力によって第一四巻が

準備されており、近い将来の出版を我々は期待している。この二種類の作業後は、長期間停滞状況にあり、参考書準備に文書館は二〇世紀六〇年代に至って、ようやく立戻った。『ロシアの港湾と港湾施設建設に関する「LITBMO文書」という表題の主題別フォンド一覧と『革命前ロシア艦隊史料参考書』が出版されたのである。しかし、この二つの出版は実際には研究者の広い層に行き届かなかった。つまり「館用」との公印が押されたのである。極く最近になって、『フォンド（一六九六～一九一七年）短評目録』と『フォンド（一九一七～一九四〇年）案内』（二冊本）が出版された。この出版の結果、事実上、文書館全フォンドに関する簡潔な情報が入手可能となった。目下文書館は、ロシア帝国海軍フォンドに係る参考書造りに取り組んでいる。これはしっかりとした出版物となるだろうが、五～七年後の出版となる公算が高い。

史料刊行準備の歴史は、再び我々を一九世紀に連れ戻す。最も早い本文書館史料の活字化は、一八二九～三〇年のことである。それは、ベルフによって準備された四巻本のペートル一世書翰集の中に収録された。一九世紀六〇年代、また『ロシア海軍史料』という一般的名称のもとに、エラギンとベセラボの監修により、史料集刊行が開始された（一八六五～一九〇五年、サンクト・ペテルブルグ、一七巻）。それは革命前の最大の出版となった。これは、ペートル大帝の時よりアレクサンドル一世治世初期（一八〇四年迄）に至る長期間の海軍史に関する多量で多種の史料集成である。出版は未完成に終り、露日戦争後、当該計画の財政援助が打ち切られると共に停止した。しかし、今日でも本史料集は疑いなく関心を引くものであり、その実用性を持っている。何故ならば、早い時期に刊行された史料の一部は、遺憾ながら、この間に紛失しており、それ故、不可欠の情報は、この出版物によってしか入手出来ないものである。（ここでは、特にガンゲート作戦史料刊行に言及しておきたい。

その海戦二百年記念に向け、専門家の協力を頼むことなく、文書館員が始めて自らの力によって、この仕事を遂行した。一九一四～一八年に、地図・略図を附した四冊が刊行された。この出版もまた、財政的困難により完結しなかった。革命初期は、基本的には、文書館は個々人に史料の刊行を任せ、館員自身は直接には刊行準備に従事しなかった。史料出版は基本的に散発的性格を有し、『海軍雑誌』『赤色文書館』『赤色海軍』等に発表された。ソヴィエト期の最初の組織的史料集『十月革命と国内戦期のバルチック艦隊』は一九三二年に出版された。大祖国戦争終結後迄このようなテーマが続き、似たテーマで八冊が刊行された。しかし、一九四四年、つまり敵の包囲からレニングラードが解放されてすぐに、文書館の歴史上始めて、歴史的史料集刊行特別部が編成され、この時には、ロシアの海軍指導者であるウシャコフ、ラザレフ、ナヒモフ、マカロフに係る史料集準備に努力が向けられ、それらは一九四五～六一年に刊行された。

今日、我国に巨大な変化が起ってから数年が経過し、以前準備されていたものをいくらか見直す必要が出て来ている。例えば、二〇〇二年には、傑出した海軍大将でクリミア戦争の英雄ナヒモフの二〇〇年記念の年となり、文書館の計画では、卓越した海軍軍人の生涯と活動にささげられた史料集に手を加えた新版を出す計画がある。

一九七〇年代末より八〇年代始め、文書館は、『一八世紀から一九世紀前半における太平洋へのロシア人の探険』なる史料集に著手した。計画は六巻が予定され、今日三巻でいて、第四巻目が準備されているが、現在五巻で終了させる決定がなされた。これは当然ながら財政問題によってであり、第一・二巻は五〇〇部出されたが、第三巻は八三〇部に過ぎなかった。

ロシア海軍三百年記念に向けて、多色刷りアルバム『ロシア帝国海軍』

が準備され、四ヶ国語で出版された。このような仕事は、我々のスタッフによって始めてのものであり、反響は悪くない。最近是我々の国際的関係が拡大しているが、史料集出版でも同様である。フェアバンク（米国アラスカ州）大学と文書館は、二巻本の、一八世紀後半期のアリュウシヤン列島探險と産業開発に関する史料集を準備している。トルコの歴史学会との接触が図られ、既に二年間、我々は史料集『ロシア海軍武官の目から見た二〇世紀初頭のトルコ』に取り組んでいる。

ここで少し横道にそれて、あなた方の注意を歴史史料としての海軍駐在武官（今日では海軍アタッシェと呼ばれている）の報告に向けてみたい。本日は、この史料に詳細に関する余裕は無いが、我々の観点では、この史料は充分注目されていないものの、研究に値するものである。というのは、内政状況、経済状況、対外関係、海軍状況と発展、そして海上交通についての極めて興味深い情報が、そこに含まれているからである。また滞在国の個々の政治家・軍人の評価がそこに存在する。

上記の仕事は、二ヶ国語で、ロシア・トルコ歴史家共同委員会の仕事シリーズの中で発表される筈であり、このことはロシア・トルコ両国の研究者に利用される可能性を提供している。

ここに言及した例は日本人の研究者にとつても興味深いものと思われ、将来的には共同出版計画が起りうるかも知れない。

ともあれ、我々は、文書館の歴史、フォンドの内容、参考書、文書館を基礎に準備された史料集に関し、非常に手短かに紹介してみた。

六 文書館の諸活動

文書館の活動とは何か？それは何よりもまず、文書館発足以降二七六年間にわたって収集された史料の保存・修復・マイクロフィルム化である。文書館活動を意味あるものにするための第二の方向性は情報提供で

ある。これは各種の情報提供資料の作成であり、主題・経歴・系譜等の質問への回答である。そこには外国人からの問合せもある。更に単独か、あるいは種々の学術文化諸機関と共同しての史料展示準備や史料原本と複成のテレビ等のマスメディアを介しての提供がある。毎年平均四五〇名の研究者が文書館を訪れると前に述べたが、その内には世界各国からの訪問者も含まれる。八〇年代末迄、文書館に外国人が訪問することは相当困難だったといふことはいつておかねばならない。先ず第一に、モスクワの文書館本局で許可証を受け取らねばならなかった。しかし、受領したとしても、事はそう容易ではなかった。その頃は、外国人研究者は、ミリオンナヤ通りの文書館で仕事することは不可能であった。総ての文書は丹念な準備の後、歴史文書館の閲覧室に届けられた。即ち参考道具は実際には入手出来なかつたのである。しかし、この一〇年間は、根本的に総てが変化した。今日、何故なる研究者、仮令外国から来た人々であっても、申請書に自分のテーマとその対象時期を記入すれば、文書館史料で作業する権利を得ることができる。そして研究者は完全に自由に、参考道具と文書を使用し、写真とゼロックスコピーを撮ることが出来る。但し最近では文書館の現行価格表に基いた有料システムに沿って事がおこなわれている。あなた方に興味あることと思うが、一九九〇年から九九九年にかけて、一四名の日本人がここで仕事をおこない、若干名は複数回来訪した。多くの場合、日本の各大学よりの教員であり、またはペテルブルグ大学の研究生だったが、一人はフランスで学んでいる日本人学生であった。テーマは相当に広いが、最も多くの関心は一八―二〇世紀、特に一九世紀後半の露日関係である。最近では日本人研究者側からの露日戦争への関心が強まっている。但し、このテーマは、ロシア人研究者にとつても、そしてある程度ヨーロッパやアメリカの研究者にとつても、非常に一般的なものである。このことは、この戦争に関する

コレクション (H. 200) をマイクロフィルム化したという複数の会社からの提案からも証明される。このほか、日本人研究者の関心はロシア海軍の個々人に向けられている。そこには、ゴロヴニン、マカロフ、メンデレーエフ等の人がいる。ソヴィエト時代に関しては僅か二名しかおらず、そのテーマは、「一九一七―一八年時ペテルグラーヴ諸工場研究」と、「一九三一年以降ソヴィエト内政に対する極東での戦争脅威の影響」である。また予期せぬテーマの中には、例えば「プガチョフ反乱―オレンブルグのオレンブルグ・カザック」というものがあり、一名の日本人研究者がこのために文書館を訪れた。文書館所蔵文書から判断して、なにがしか彼が有用なものを発見しえた、と確認しうる。

また、この数年間に二度程日本の国会議員の訪問があったことにも言及したい。彼等に対し、両国の関係史をあらわすいくつかの史料展示がなされた。九〇年代後半には、いくつかの日本のテレビ局が教育番組を準備し、そこには我々のフォンド史料が利用された。

七 日本関係史料

さて、次に日本関係史料の概観に直ちに移ってみよう。

三百年にわたりロシア海軍の艦船は、多くの世界周航と種々の科学的探険をおこなった。文書館には、世界の多くの国々の状況と発展に係る大量の史料と図像がある。多くの場合、これらの史料は多大な科学的関心を引きつける。つまり、これらは、高度な教養を有し多方面に発展した海軍士官達によって作成されたものだからである。多くの場合、直接の作成者は判然としないものの、世界の種々の国々とロシアとの関係の発展への貢献、人々の生活やこれらの国々の経済に関する記述への貢献は非常に高いものである。そして艦隊司令官や指揮官の軍事報告（または単なる報告）は、歴史史料としての特別の価値を有している。それら

は、数年の間隔をおいての個々の港湾や国家の発展を追及する可能性を与えているということ、我々の作業の経験からいうことが出来るのである。一例として、朝鮮釜山に数年の間隔をおいて訪問した艦隊司令官の報告をとってみよう。このことは彼に、その間に起った総てのことに対し評価する可能性を与えるのだが、それは今日の研究者にとつては、信頼するに足る、価値ある情報を有している好史料を入手出来るということなのである。史料としての軍事報告は、現在、研究者によって実際には利用されてはいないが、我々の観点からすれば、良好な史料的基础になりうるものであり、そして露日関係研究者においても、それを基礎として、将来興味深い報告を行うことが出来るだろう。

既に言及したように、文書館には世界各国に関する大量の史料が存在するが、本日は日本に関する史料全体について話してみよう。昨年夏、一出版社が文書館に来て、露日関係に関する短い参考書乃至案内書作成の可能性を検討する提案をおこなった。このため予備調査がおこなわれた。その結果、今日文書館には、これにかかわって概略八千ファイルが存在しているが、史料自身の数はもう少し多いだろうことをつきとめた。その年代は、一八世紀前半期より二〇世紀三〇年代にわたっており、この史料は六〇―七〇フォンドの革命前及び革命後の海軍文書に集中している。いくつかの名称のみを挙げてみよう。「海軍参謀本部文書」「海軍大臣及び海軍省官房文書」「海軍省監督局文書」「海軍省人民委員会文書」「海軍省水路部文書」「太平洋艦隊文書」「極東諸港局文書」「日本駐在海軍武官文書」「極東総督臨時海軍参謀部文書」「水路部本局文書」「労働赤軍海軍局文書」「赤色バルチック艦隊参謀部文書」等々、この他にも多く存在する。

我々が興味を感じている問題にかかわって、どのような情報を我々は手に入れることが出来るのだろうか？なによりもまず、それは日本列島・

諸都市・諸港湾の記述であり、多くの地図と見取図がある。日本の自然的資源に関する情報については、一九〇一年、海軍駐在武官ルーシンが、非常に詳細に報告している。その報告への添附書類は「海軍参謀本部文書」の中に含まれている。彼の報告からは、鉱山業における危機と日本での石油採掘米國資本についての情報が得られる。日本の炭坑における一八八七年現在の石炭採掘組織に関する記述は、砲艦シブチ号艦長の報告に存在する。またそこには、同程度の興味深い情報が日本の住民に関して見い出され、人口・構成・習慣・宗教・職業・医療サービス等が対象となっている。「両グレイギ大将文書」の中には、一八五八年のウフトムスキーの宛先不明書翰があるが、そこには、日本人についての一連の人類学的情報がある。

「ドゥバソフ大将文書」中には、いくつかの史料があり、そこにはブディオフスキー中佐作成の一九世紀末〜二〇世紀初頭の日本民族の諸特徴に関する覚書があり、また日本におけるギリシャ正教についての筆者不明の論説が収められている。駐在海軍武官ルーシンの報告書には、一九〇一年現在の日本の総人口とその福祉の悪化が述べられている。巡洋艦アドミラル・ナヒモフ号艦長の報告をも含めた多くの史料の中には、一八八〇年代から九〇年代にかけての大阪でのコレラ、長崎での天然痘・コレラ・赤痢に係る情報が存在している。日本内政状況についての重要情報を、我々はスクールイドゥロフ海軍中将や戦艦諸司令官の軍事報告から入手することが出来るが、その中には一九〇三年の政治危機に関するものもある。シエスタコフ大将の日記には、一九世紀八〇年代の日本の改革についての短い報告がある。それよりも価値ある情報は、駐在海軍武官ブチロフスキー、チャーキン、ルーシン、ヴォスクレセンスキー等の報告より入手出来る。その中では、一九世紀九〇年代から二〇世紀最初の日本の状況、政治的潮流、代議士の政党構成、日本の国内状況の特

徴づける法規その他さまざまな問題での変化等が語られている。経済関係の諸論説もまた、とても興味深い史料である。そこには、フランス語で書かれた筆者不明の、一九〇〇年現在における日本の財政的経済的状况にかかわる覚書や日本のいくつかの工場と造船所に関する記述、一九一七年現在の金属産業状況の情報等が存在している。一九〇一年のルーシン報告の一つは日本の軽工業に関するものであり、ここでは、生糸・綿花・陶磁器の生産の件やタバコ産業内での米國資本が話題となっている。総ての海軍武官は今日の我々に、日本の鉄道輸送の過去を見る可能性を与えており、また一九〇三年時の開戦を予期した結果としての商業停滞に関する資料が引かれている。文書館史料の中には、日本の通商船団についての興味深い情報があり、その内の一つは、一九〇六年一月一日現在の通商船団状況に関するデータ書類である。金融・銀行・貨幣制度・価格形成等にかかわるものも文書館収集史料の中に存在しているが、この問題に関してまた、海軍武官の諸報告が基本的なものであることを特に強調しておきたい。漁業と水産業は日本人の生活で大きな役割を果たしているが、文書館には、一八七四年の捕鯨業のための会社設立史料や、一八九六年現在の漁業・捕鯨業・海獣皮革企業の員数に関する史料がある。また、一九〇三年砲艦マンジュール艦長の報告の中には、日本漁業の発展についての情報が存在する。ルーシンは報告書の添附書類の中で、明治以前の日本の大建築(宮殿・廟)についての情報を引いている。

このほか、高雄港や舞鶴鎮守府建設史料も存在する。しかしながら、我々は海軍文書館所蔵史料について語っているのであり、それ故に、最も豊かな一連の情報は軍事力に関するものである。即ち、軍事の一般的諸問題、軍事関係官庁予算、軍事技術と軍備、軍病院の機能等にかかわるものである。多くの興味深い情報は、直接的に艦隊に関するものであり、特に艦隊の構成、艦隊配置、演習及び航海、海岸防

備組織、士官養成そして個々の幹部についてのものである。「海軍参謀本部文書」には、一九一四―一六年時の日本海軍指導者達の写真が存在している。また「アレクセーエフ大将文書」の中には、一九〇三年一月附け駐日海軍武官ルーシン中佐の太平洋艦隊司令官宛報告があり、そこには、日本海軍将校についての情報を留めた三冊のノートが附けられている。それは、彼個人の観察・会話によって作成されたと共に、仏国武官海軍大尉ブアセルから得た、フランスに学び、そこで勤務し、フランスの海軍士官と交渉を持った人々についての情報も含まれている。いくつかの特徴づけを示してみよう。「子爵伊東(祐亨) 大将は勇敢で善良で陽気な性格だ。外国人に対して特別の好意を抱いてはいないが、その中にはイギリス人も含まれている。迫りつつある戦争においては艦隊最高司令長官となるだろう」⁽²⁾。東郷(平八郎) 中將に関しては若干の専門的不十分さについての言及があり、その中には「常備艦隊司令長官時代に、艦隊の投拔錨を観察する機会を有した外国人の意見によれば、演習は非常に不満足に行われた」、しかし、それに付け加えて、「東郷中將個人についていえば、勇敢でエネルギーシユであり、おそらく毅然とした性格にちがいない」⁽³⁾と述べられている。若い常備艦隊司令長官上村(彦之丞) 少將についての評価は興味深い。「上村提督は薩摩閥で、若く活発であり、堂々たる風采をしており、極めて知的で最新派の代表者だ。上村提督は戦艦をよく知っており、疑い無く優れた艦隊司令長官となるだろう」⁽⁴⁾。もう一人の若い常備艦隊司令長官伊東(義五郎) 少將に関しては、極めて独特な評価づけがなされている。「彼は勤勉らしいが、能力の乏しい人物で、頭がにぶく知的ではない。フランス人女性との結婚によっても、フランス人やヨーロッパ人一般への味方となることはなかった。あまり良くない海軍軍人で、本来的には海の男たりえない」⁽⁵⁾と。

文書館史料は日本の外交政策への多くの情報を有しており、そこには

一七三八―一九一七年間の経済・科学・文化関係を含んだロシアとの諸関係に係るものがある。それ以外にも、なんらかの程度において、アルゼンチン・ベルギー・イギリス・ドイツ・インド・スペイン・イタリア・中国・朝鮮・モンゴル・シヤム・アメリカ・フランス各国と日本との関係を物語る史料がある。単純で好奇的な意味でいえば、「リトケ大将文書」の中には、古い時代に日本人に使用された書翰用紙が保存されている。⁽⁶⁾

一九一七年以降の史料は単一な性格のものである。これはソ連邦での日本人駐在武官及び在日ソヴィエト駐在武官に関する情報である。しかし若干の史料は異なる性格のものである。そこには、チョールヌイ・プリンス号引揚げ(一九二七―二八年)⁽⁷⁾にかかわって働いた日本人専門家の名簿があり、コマンドルスキー島への日本人の科学的産業的探検隊組織(一九二三年)⁽⁸⁾、対馬海戦で沈没したロシア艦引揚げ(一九三三年)⁽⁹⁾等の史料がある。

我々は非常に短時間で、日本に直接関係する諸史料について見てきたが、これ以外に、一九〇四―五年露日戦争に関する個人フォンドにあなた方の注意を向けさせたい。露日戦争は、ロシア海軍文書館史料の中に、特別に広汎な関連史料を有している。本日はそのものには触れない。何故ならば、我々の観点では、このテーマには、独立した研究会が可能であり、そこでは、戦前期、戦間行動、戦後諸事件等が話題となるだろう。ここでは、文書館には、ロシア人捕虜に関し日本で作成された膨大な量のカードが存在するということだけ指摘しておきたい。残念ながら、このカードの由来や、どのようにして文書館に来たかは判らない。今日、カードは整理され、きちんとしたアルファベット順で並べられている。自分達の仕事の中で、我々は相当の頻度でこのカードを参照しているのである。

八 露日戦争に関係する個人史料

という訳で、本日の報告の最後は、露日戦争関係の文書館所蔵個人史料に向けられるが、重要度に応じての史料の紹介ではなく、フォンド番号順におこなっていきたい。

「ブルシエロフ少将文書」(Φ・33)は、本テーマに係る往復書翰があり、その中にブルシエロフ自身と、やがて駐日海軍武官となるヴォスグレセンスキー大尉兩名の、対日戦争の際とるべき極東での対策に関する興味深い覚書(一九〇三年)がある。一ファイルは完全に露日戦争に係る文書から成っており、この中には休戦に関係する一九〇五年の文書や、「一九〇四―五年対日戦での海上での火砲操縦と射撃について」と題された太平洋巡洋艦司令部旗艦砲兵の覚書がある。

ドゥバソフ大將は、ロシア史の中で非常に興味深い有名な人物であるが、その文書(Φ・34)には、第一次ロシア革命期のモスクヴァでの諸事件についてのものがある。そこには多数の面白い史料があるが、大部分は所謂プリスキー事件についてであり、国際機関での審理にかかわるものである。この中に日本地図や一九〇五年二月一日付日本艦隊リストがあり、両国艦隊の戦略的諸要素が引かれていたり、また日本のドックに関する情報がある。文書の中には、旅順近傍でなされた東郷大將指揮下の戦艦との戦闘を述べた宛先不明の書翰があり、この戦闘の説明図もある。更にここには、戦争文書出版計画案と戦争叙述予定案も存在している。

マカロフ中將は旅順防衛の指導者で、太平洋艦隊司令長官であったが、戦争初期に戦死したので、彼の文書(Φ・11)には、この時期のものは存在しておらず、ペテロパヴロフスク艦沈没の写真のみがある。

サブリン中佐はよく知られている人物ではなく、戦争時にはレトビザ

ン艦の少尉だったが、彼の文書(Φ・21)には多くの関心をそそる史料がある。ロシア海軍軍人の捕虜滞在期史料はとりわけ然りである。写真や松山への捕虜移動見取図等があり、一九〇五年日記は全く紹介されてはいないが、その内容は、我々の軍人に対しても、捕虜を管理した日本人に対しても信用をたかめる性格のものでないことは、公平に見た場合には理解されるだろう。

「シジェンスネール中將文書」(Φ・22)は戦争記事の切抜きが主であり、また太平洋艦隊の一九〇四年七月二八日海戦に関し、早くも一九〇六年に執筆されたレイツェンシュテインの覚書がある。

「ステツェンコ中將文書」(Φ・24)は、露日戦争文書と一般的に表題された数ファイルの史料がある。その中には、艦隊行動の記述や新聞切抜き、更に当時中佐だったステツェンコの海軍省宛報告がある。この時彼は、休戦交渉のため露日両国艦隊代表者会談組織問題の総司令部海軍側官房長であった。

アレクセーエフ大將の名は説明を要しない。何故なら、その名は極東にあまりに深く結びつけられている。彼の文書(Φ・25)には非常に多くの興味深い史料が収められており、その中には、一九〇四―五年の日記、開戦前夜の交渉、戦争準備、日本海軍の演習、旅順防衛準備、開戦前夜の日本の財政的経済的状况、一九〇二―三年の両国関係についての情報がある。また更に皇帝ニコライ二世との戦争についての往復書翰、日本との和平の予備的条件、戦争に関する彼の意見草案や戦地からの書翰が存在する。一九〇四年一月一日現在における極東での露日両国海軍力の比較表⁽¹⁰⁾、一九〇四―五年戦場への日本軍部隊の発遣順序、ポーツマス以後の日本国内の政治潮流に関する一九〇六年一月一日付ソウル発遣東京特命全權大使イズボリスキー宛外務省官僚プランソン私翰写などには明白な価値がある。最後のものには特に次のように述べられている。

「最初の落胆の瞬間が去った時、日本人は我を取り戻した。政府が広範囲に執った宥和策がこれに貢献した。政府は宮城の傍の広場に総ての獲得戦利品を展示するよう命令した。数百の大砲と弾薬箱、数千挺の小銃、これらは総て整然と間隔をおいて並べられ、ロシア軍小銃が林立しているかの如き印象を産み出した。雲霞のような大群集がそれをめでに集つたのを見て、日本人の興奮を理解するのは容易だろう⁽¹²⁾」と。

グリゴリツチ大將は、旅順港司令官として同港防衛に参加したが、彼の文書(Φ. 701)の総てがこれと関係しており、特に海軍砲台や航空部隊にかかわる情報がある。

エッセン大將は最も有名なロシア海軍軍人で、後日バルチック艦隊司令官になった人物だが、その文書(Φ. 75)には、旅順防衛についての回想があり、その中には艦隊配置図や戦争開始についてのメモがある。またこの文書には、開戦前夜の日本の財政状況情報があるし、戦時期の家族との往復書翰もある。

「チェルカソフ大佐文書」(Φ. 14)は、非常に小規模なフォンドで、僅か一三ファイルしかないが、その内二ファイルは旅順での戦争準備の回想であり、その中には、日本海軍の略図や、この問題に関する一九〇五―一一年に執筆された様々な人々の覚書がある。

「ロジェストヴェンスキー中将文書」(Φ. 1233)も、とても小さなフォンドで、僅か三〇ファイルから成立しているが、そこには対馬海戦に関する史料や、一九〇五年九月二日付東郷大將からの電報をも含んだ人々からの諸電報がある⁽¹³⁾。

「ベラベネツ中佐文書」(Φ. 1235)は僅か八ファイルから成立しているが、その内の一ファイルは、ベラベネツ大尉の露日戦争参加と捕虜としての滞在を記した日記である。

「リムスキー・コルサコフ大佐文書」(Φ. 1236)には、一九〇四年

大尉当時の旅順とベレスペート艦勤務時の日記がある。

我々は一度ならず駐日海軍武官ルーシンの名を挙げてきた。文書館には彼の個人フォンド(Φ. 1235)があり、ここには軍事問題に関する彼の往復書翰、電報、ロシア艦隊の戦闘行動に関する情報がある。

最後のフォンドについて本日言及しなければならぬ。これは「B. E. エゴリエフ少将文書」(Φ. 1235)である。この中には露日戦争に参加したエゴリエフ父子の史料がある。そこには第二太平洋艦隊の行動にかかわるE. P. エゴリエフの旅日記、戦時下の父子の往復書翰、更に戦後の艦船・休戦期の日本使節団代表・スクーター型ゴイオー号からの日本人捕虜・日本船等の写真がある。

露日戦争に関する文書館所蔵史料について語る時は、いくらでも第七六三フォンドに言及しなければならぬ。これは収集史料で、正確な名称は、「露日戦争に関する日記・覚書・書付及び新聞切抜」である。

収集史料の基礎は、海軍参謀本部に設置された「一九〇四―五年戦争時艦隊行動記述に関する歴史委員会」によって集められた回想録・覚書・日記・書翰・公文書写・新聞切抜等々が形づくっている。それらは、なんらかの程度において、露日戦争期艦隊行動に関する著作準備の際や、「一九〇四―五年露日戦争、艦隊行動、史料集」と題する多冊文書集出版の際利用された。この収集史料は海軍参謀本部文書とともに文書館に入ってきた。

右の収集史料は、その性格によって二つの纏りに分類されている。

第一、露日戦争期の艦隊行動に関する回想録・書翰・日記・覚書・公文書。それらは戦争の基本的事件に対応した分野毎に分類されている。

第二、ロシアや外国の定規刊行物からの主題別の収集と散発的切抜である。

今日では、このフォンドは五三三ファイルからなり、その中の多くに

は、ルーシン、コルチャック、チミレフ、エッセン、シシエンスノヴィチ、ヴィレニウス等を含んだ著名なロシア海軍軍人の名が見い出せる。本フォンドには、日本語史料もある。

おわりに

以上、我々は極めて手短かに、ロシア国立海軍文書館の歴史と史料構成を紹介し、日本にかかわり、又露日関係に関する史料の概観をおこなった。より詳細には、ロシア海軍軍人の個人文書から見た露日戦争のテーマにのみ限って検討した。

相互の関心をひくテーマでの我々の接触の結果、将来において共同研究と共同出版が可能となることを我々は強く期待したい。

【註】

(1) 「ミリオンナヤ通りの宝蔵」『アンドレフスキー・フラッグ』誌、一九九四年号所収

- (2) PFABMΦ, φ. 32, on. 1, d. 168, r. 4-06.
- (3) PFABMΦ, φ. 32, on. 1, d. 168, r. 8-8-06.
- (4) PFABMΦ, φ. 32, on. 1, d. 168, r. 20-20-06.
- (5) PFABMΦ, φ. 32, on. 1, d. 168, r. 28-29-06.
- (6) PFABMΦ, φ. 15, on. 1, d. 31, r. 6-7.
- (7) PFABMΦ, φ. p-1495, on. 1, d. 2, r. 1-25, d. 3, r. 1-12
- (8) PFABMΦ, φ. p-180, on. 1, d. 925, r. 101
- (9) PFABMΦ, φ. p-914, on. 1, d. 42, r. 14, 19
- (10) PFABMΦ, φ. 32, on. 1, d. 497, r. 2-9
- (11) PFABMΦ, φ. 32, on. 1, d. 214, r. 19-19-06.
- (12) PFABMΦ, φ. 1233, on. 1, d. 30, r. 57, 71
- (13) PFABMΦ, φ. 1233, on. 1, d. 30, r. 57, 71

(二〇〇〇年三月九日報告の翻訳、訳者は宮地正人)